HamaMed-Repository
浜松医科大学学術機関リポジトリ
浜松医科大学
Hamamatsu University School of Medicine

Changes in the characteristics and outcomes of COVID-19 patients from the early pandemic to the delta variant epidemic: a nationwide population-based study

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮下, 晃一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/0002000123

論文審査の結果の要旨

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の死亡リスクに関するエビデンスはパンデミック初期の入院患者を対象とした研究結果に基づいたものに限られていた。そのためパンデミック初期以降の入院患者および外来患者を含む悉皆性のあるデータによる解析が求められていた。

本研究は、本邦で医療を受けた入院・外来レセプト情報の約 99%を網羅するレセプト情報・特定健診等情報データベースを用いた検討である。2020 年 1 月から2021年8月にCOVID-19と診断された成人患者のデータを、起源株流行期、α株流行期、δ株流行期にわけて、年齢・性別・併存症別の死亡率を調査し、また多変量ロジスティック回帰モデルによって、死亡関連リスク因子を解析した。本研究は、浜松医科大学臨床研究倫理委員会の承認を得て行われた（承認番号：21-024）。

937,758 人の成人 COVID-19 患者が同定され解析対象となった。全死亡率は起源株流行期で 2.9%、α株流行期で 2.2%、δ株流行期で 0.4%と低下した。起源株流行期からδ株流行期の死亡率を年齢階層別に解析すると、65-79 歳は 4.9%から 2.8%、80 歳以上は 16%から 9.7%へと低下した。高齢、男性のほか、併存症として認知症、腎疾患、うっ血性心不全、慢性閉塞性肺疾患、転移性固形癌、はいずれの流行期においても全死亡リスク上昇と関連することが確認された。

δ株は病原性が比較的高いとされていたが、本検討によってδ株流行期の死亡率はα株流行期以前より低いことが確認された。δ株流行期には 65 歳以上の高齢者へのワクチン接種率が 90%程度に到達していたことが要因と考察された。

審査委員会では悉皆性の高いデータをもとに、日本人における COVID-19 の死亡率とリスク因子を明らかにした点を高く評価した。以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者　　主査　宮入　烈
　　副査　鈴木　哲朗　　副査　小川　法良